

# 亡き家族よ今も胸に

## 遺族半数「恋しい」■子を失い自責強く

阪神・淡路大震災で犠牲になった6434人のうち、倒壊した家屋の下敷きになるなど「直接死」した犠牲者5454人の遺族を対象に、朝日新聞社と関西学院大学人間福祉学部は心の復興について尋ねる意識調査をした。回答者の半数以上が、亡くした家族を今も「恋しく、いとoshii」と感じていた。震災から20年を迎える今も故人への強い思慕の念が続き、生き残ったことへの後ろめたさや自らを責める気持ちを抱いている実態が浮かび上がった。

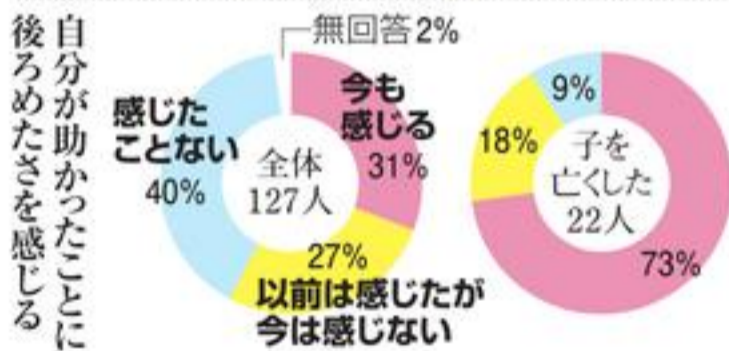
2面＝価値観に変化  
18・19面＝遺族の声  
34面＝復興住宅の今  
35面＝頑張るとるで  
デジタル版に特集

### 阪神大震災 20年

本社・関学調査

調査では、震災で見た光景を繰り返し夢に見るトラウマ（心的外傷）反応を遺族の4割が示し、東日本大震災の報道に触れ心身への影響があった人は6割に多かったことも分かった。5454人の名簿をもとに

#### 阪神大震災 遺族調査



20年前に大震災で家族を亡くしたことに、今の悲嘆の状況を聞いた。亡くした家族を「どうしようもないほど恋しく、いとoshiiと感じることがあるか」との問いに、「いつもあ

郵送。1019人の住所に届き、うち112遺族の127人から回答を得た。

「亡くなった家族が恋しく、いとoshii」と15人が答えた。「しばしばある」の22人、「ときどきある」の30人と合わせて半数以上のほった。

家族の死が「いまでも信じられないと感じたり、どこかで生きていると考えたりすることがあるか」との質問には、「いつもある」が助かったことに後ろめたさを感じたことにはあるか

### 痛みの分かち合い必要

池埜聡教授の話 遺族は、家族を突然亡くしただけでなく、自らも命の危険にさらされる重層的なトラウマ体験をしたことがわかった。その痛みが時間によって和らげられた部分がある一方、「なぜ亡くならなければいけないのか」という問いを抱き、震災は今も続く人生の歩みの一部になっている。生存者罪悪感（サバイバー・ギルト）は、心理的な負担になる。同時に、死の意味を探求し、生のあり方を模索するエネルギーにもなり得る。遺族に寄り添うことが大切だ。

と尋ねると、「今も感じている」が16人、「以前は感じていたが、今は感じていない」が4人。のほり、配偶者に罪の意識を感じる「生存者罪悪感（サバイバー・ギルト）」を今も抱き、「以前は感じていたが、今は感じていない」も34人いた。特に子どもを亡くした22人が明らかに多かった。千種辰弥、佐藤卓史、野呂雅之